

## 『高等学校国語科学習指導研究』

—小説教材の取扱いを中心に—

本書は広島大学付属中・高等学校において著者、三浦和尚氏が長年積み重ねてこられた実践研究を集めたものである。

小説教材の授業を構築していくことは、現場の教師にとつては多くの問題を克服して行かねばならない難しい仕事である。その仕事に直面する際に、我々が頼れるのは決して抽象的な文学教育論ではない。勿論、単なる具体的な授業記録でもない。必要なのは、その両者を見据えた上で作り上げられた中間理論とも呼ぶべきものである。

本書において集成された授業実践は優れた授業実践であるとともに、三浦氏のこういった中間理論を樹立しようとする試みが、随所に見られるものである。それは各授業実践記録の末尾に付されている考察に当たる。確かにまだ、理論と呼

ぶには具体的すぎる面も持ち合わせているが、実際の授業を見据えた上で省察されているだけあって、その一つ一つが理論として高められていく可能性を秘めている。

また氏の授業実践記録に見られる長所として、教材分析が非常目的を得て、充実したものとなっている点が挙げられる。本来、どうしても作品分析が先行する形で授業の構築が行われ易い小説教材だけになかなか教材分析にうまく消化されにくいという難点を含み持つ。しかし氏は十分な作品分析を経た上で、かつその作品分析を反映した教材分析を行い、授業を構築している事がうかがわれる。そのため授業自体の難所があらかじめ予期された上で授業が行われているのである。そのため、氏の明らかにしようとする

「どのようにして教えればよいのか」、すなわちどのような指導方法をとるべきなのか、作品の特徴をふまえた形で明らかにされている。それは、授業という一つの課程を通して、試みられ、実証され、改良されていく。このようにして授業実践から切り出された一つの方法は、抽象的な理論が決して持ち得る事のない実用性と応用性を備えた方法論なのではないだろうか。

このような優れた中間理論を随所に含みながら本書は、氏の授業構築の際に想定されている自分自身のスタンスがいかに学習者に近いものであるか、という点も滲み出している。それは単なる学習者を見る目の優れている点だけに起因するものではなく、教師が一読者として学習者の前にさらけ出せるだけの謙虚さと読解力に起因するものなのであろう。

また本書は序章・結章のほかに、I、II部で構成され各部、それぞれ六章構成となっている。I部では、「羅生門」「藪の中」「気の弱い男」「舞姫」等の小説教材がその特徴を明らかにされた上で、ど

のように授業を構築するべきなのか、という点が省察されている。続いてII部においては、授業構築の方法、小説教材を扱う授業の具体的な方法を明確にしている。こうとする課題を持って、取り組まれた授業実践が収められている。具体的には「セメント樽の手紙」「アゲハチョウ」「蜜柑」「山月記」「沈黙」等である。

このように本書は中間理論として大いに授業構築に有効な方法論を随所を含む、授業構築の際に頼りに出来る、また有効な示唆を得られる優れた実践集となっている。

(A5判 266ページ)

一九九二年 七月十五日

溪水社 ペーパーカバー 二、八八四円

ハードカバー 三、九一四円)

(松友一雄)